

## 4. 博物館におけるボランティア活動参加者の心がまえ

石川 昇

### 1 活動を選択する

ボランティア活動は一般に、自ら進んで、社会や他者のために、対価を目的とせず、自分の知識、労力、時間、財などを提供する活動である、とされている。このような自発性（自主性、主体性）、社会性（公益性、利他性）、無償性（無給性、非営利性）を3原則と言い、現状をよくするためという開発性（先駆性、創造性）を加えて4原則と規定する人もいる。

博物館におけるボランティア活動への参加は、参加しようとする博物館の活動の目的や趣旨に賛同するとともに、活動内容に興味・関心を持ち、やり甲斐と学習意欲を感じられるかどうかが重要だ。博物館における活動は知識や感動を発掘したり、人々に伝えたり分かち合ったり、あるいは後世に遺す活動であり、活動のテーマについての蓄積した知識、学習意欲、情熱は必要不可欠であると言えよう。

このように、博物館におけるボランティア活動は3原則に加え、学習意欲、自分を社会に役立てたいという社会還元の意欲が重要だが、それに加えてプラスアルファの動機があってもよい。たとえば、健康づくり、友人づくり、地域づくり、余暇時間の有効活用などの目的は活動に励みと潤いをもたらすだろう。

### 2 活動に責任と謙虚さを

いつ、どこで、どのようなボランティア活動をするかという約束をした時点で責任が生じる。博物館も博物館利用者もボランティアに期待をしていることを忘れないようにしたい。

また、ボランティア活動は学習につながるという側面があるが、ボランティア活動より学習を優先させて利用者に不便をかけたり不快な思いをさせるようなことがあってはならない。博物館におけるボランティア活動と学習との関係は、ボランティア活動を行う前に活動を行うための研修や学習があり、活動を行いながら質問をされたり学習の課題が起こったりすることで、学習と活動の循環がある。しかし、そもそも充実した活動のためには常に自分の知識を確認したり深めながら行うという面がある。とりわけ、コミュニケーションという活動は優れて学習性を有する活動であり、人に教えたり伝えたりすることによって、知識や感動を共有し分かち合うとともに、交流することで相手からも教えられる、言い換えれば教え合い学び合うという側面がある。実際に、ボランティア活動をするなかで専門的知識を有する利用者と出会って教えられるということが起こることもあり、活動にあたっては謙虚な姿勢で臨みたい。

### 3 博物館のスタッフの一員であるという意識を持つ

博物館はそれぞれのテーマに関する資料を収集、保管、展示して、一般公衆の調査研究、教育普及、レクリエーションに資する事業を行うとともに、調査研究を行う機関であり、そのような活動を通して、教育、学術、文化の振興と発展に寄与するという公共的な目的を有している。そのような目的達成のために、博物館の活動は趣旨を持ち、方向性を定め、ルールを持って行われている。このように、博物館の活動は一人一人の職員、ボランティアが恣意的に行っているのではなく、機関として動いていることを理解する。そして、ボランティア活動も機関としての博物館の活動を支えるスタッフの一員であり、チームとして活動しているという意識を持ちたい。

そうであることから、ボランティアの活動はルールに則って行う必要がある。ある時ある場面

さえよければよいということではない。たとえば、ある時にすいているのでこれ位ならサービスしてもよいだろうと判断して手厚いサービスをしたが、その利用者が次に来たときに同じ事をしてくれないと苦情を言う場合がある。一人一人を満足させることは重要だが、ルールを逸脱する場合は慎重さを有する。

#### 4 博物館利用者との関係

博物館のボランティア活動は博物館利用者とは接する内容が多いと思われる。利用者との接遇においては、ボランティアという館のスタッフとして、歓迎の気持ちをこめ、暖かく接する。利用者には微笑みをもって接し、博物館における時間を快適かつ有意義に、満足して過ごしているかどうかを気づかい、場合によっては声をかけるようにする。とくに高齢者、青少年、障害者には気を配る。また、利用者には真摯に公平な態度で接し、活動上知りえた秘密は外部に漏らすことがないようにする。

利用者との対応で気をつけるべきことは、利用者は利用者の論理や都合で動いていることを忘れないことだ。子どもが「もっとここにいたい」と言うのに対して、親が「ほかもあるんだから早く行こう」と言う光景はよくあるが、そこで子どもの自発性を尊重せよ、と言っても親にとっては余計なお世話なのだ。また、利用者は博物館の施設やルールを隅から隅まで熟知して動いているわけではないので、気づかずに博物館のルールからはずれたことをする場合もある。

また、子どもに対しては教育的配慮も必要である。展示体験、実験、観察、製作、工作などにおいて、完成、満点を目標に、すべてを教えることは良いことではない。自分自身で解決したり、発見したりした方が、感動も大きいし自信もつく。子どもが自分でそういう体験を味わえるように適度に助言をするとともに、できないことで自信をなくしたり落胆しないようにすることも重要で、その対応は注意を要する。

#### 5 仲間や博物館との関係

博物館におけるボランティア活動は、人々が自分たちの好きなことをしながら社会貢献をするという、いわば同好会的な人間関係で、目的と知識、友情、さらに達成感を共有する。そして、自ら求めて作っていくことも離れることも、濃くすることも薄くすることもできる。そこが血縁、地縁や職場の人間関係などと異なる特色がある。このような機会を得たことを大切にして、自分の人生を充実させるようにすべきであろう。そして、仲間と協調、協力しながら、互いに向上し合いながら、より意義のある活動をしていくようにする。ボランティアの世界は集団としての目標達成機能とともに集団維持機能も重視すべきで、仲間の持ち味を引き出し合いながら、仲良く楽しく活動するようにしたい。そして、性、年齢、権威などに関する嫌がらせや差別などがあってはならない。

このようなボランティア活動の人間関係に入るときに気をつけるべきことは、ボランティアの人間関係は活動の過程で形成されていくということだ。肩書きや前職は関係ないことを意識しておく。ボランティア活動に求められる能力は、活動や人間に対する理解、使命感、活動の分野に関する専門的な知識、ボランティアとしての知識や経験、教育やコミュニケーションに関する力、人間的な魅力などであり、活動の実践の過程で人間関係が形成されていく。

また、博物館に対しては目標を共有して、館とともにボランティア活動の内容、方法、ルールを創っていく姿勢が重要だ。すべてを館が一方的に創ってボランティアはそれに従うのではなく、

ボランティアが自立的に活動を創っていくことでやり甲斐も増えるのではないだろうか。そして、建設的な提案は積極的に行うべきだ。

#### 6 自分自身の心身のあり方

ボランティア活動に際しては、体調が悪く回りの人に心配をかけたり、怒りや悲しみに捕らわれたままで活動することがないようにし、心身の状態が万全な形で臨むようにしたい。そして、常にボランティア活動の原点、初心を忘れないようにする。とくに、人とコミュニケーションを行う活動においては、前向きで新鮮な気持ちで、利用者に優しく謙虚に接するようにする。

また、高齢になるにつれ、さまざまな面において衰えが生じるようになるが、そのことを冷静に自覚して、ボランティア活動のできる範囲で活動する。しかし、決められた活動に支障を来すようになったときは引退してボランティア活動をバックアップする存在、あるいはボランティアを励ます存在になるべきだろう。

ただ、ボランティアという活動はどこから登録されたり公認されなければできないということではない。一市民として、社会や人のためになる活動はできる。素晴らしい絵の前で人目に触れるように感嘆して見せたり、工作ができた子どもによかったねと励ましの声をかけことなどもボランティア活動である。

## 高齢者の特性を活かした学習プログラム

### ー北海道開拓の村ボランティアにみるプロフェッショナルな意識ー

北海道開拓の村学芸員 中島宏一

#### はじめに

北海道開拓の村（以下「開拓の村」）では、1987年（昭和62）年以来、ボランティア制度を導入し、解説、演示活動等を通して来場者サービスにあたっている。2005年度（平成17）の登録者は187名でその平均年齢は67歳（男性123名69.7歳、女性64名59.1歳）であり、60歳から79歳の層が82%を占める高齢者で構成された組織である。ボランティアの平均年齢は、ボランティア制度導入以来男女間の構成比に変化があるものの、この20年変わらずに推移している。

一方、職員は20代～40代前半で組織されており、ボランティアとは20～50年ほどの年齢差がある。

開拓の村ではボランティア制度導入以来、職員にない資質、すなわち長い生活経験を有する人材をボランティアに求め、豊富な歴史的建造物や内部展示、恵まれた自然環境をもとにして事業を展開している。本稿では、ボランティアと職員との協働意識に基づいた日常の活動の一端を報告する。

#### 1. ボランティアから学ぶ

高齢者の学習では、開拓の村に見られるように学習を実践する人たちのほうが、その指導者や講師よりも年長であることが多く、先行世代が次世代に文化遺産を伝達するという観点からの学習や教育が考えにくく、独自のプログラムが必要である。<sup>(1)</sup>

開拓の村のような歴史系博物館で、職員がその専門性を盾に高齢者であるボランティアに接しては、両者の協働意識を形成することはできない。職員の専門性と生活経験が豊富なボランティアの多面性が相互に尊重し合うことで、利用者、特に子どもたちへ教育的配慮（社会教育）に基づいた歴史や昔の生活文化を円滑に伝承することができる。

そこで、開拓の村ではボランティアが長い生活経験で培った技術と職員の専門性を融合させ、利用者に円滑な学習支援を提供することに重点を置いている。そのためには、職員もボランティアから学ぶ姿勢が最も大切である。この学び合いが、開拓の村における高齢者学習プログラム、すなわちボランティアと職員との関係である。

解説案内、演示活動といった開拓の村のボランティア活動は、開拓の村をステージとして昔を語り、昔の技術を伝えることであり、職員の業務とは一線を画している。つまり、ボランティア活動は職員では補うことができないほど確立されているのである。

その中でも、近年ボランティアが企画、実践する事業が展開されるようになり、職員はそのボランティアのサポート、つまりボランティアが活動しやすい環境を積極的に整備するように心がけている。この環境整備とは、その場を整備するだけでなく、ボランティアの技術を職員が学び、職員がボランティアに専門技術を伝達する場、すなわち学び合いの場である。

例えば、「村のりんご教室」、「わら細工づくり」、「昔語り」、「ソバづくり」などは、ボランティアと職員とがアイデアを出し合い、役割を分担しながら企画し具現化した子ども向けの事業で、ボランティアが有する技術と開拓の村の機能を有機的に結合させ、利用者のニーズとスムーズに

マッチングしている。また、子どもたちに提供する資料（副読本）も基本的にはボランティアが作成し、職員が監修（印刷、製本など）している。

さらに、これらの事業ではボランティア内で後継者の育成にも注力していることが特筆される。

開拓の村では、単にボランティアに事業の企画を委ねたり労力を期待するのではなく、生涯学習の場として、ボランティアの学びの場、社交の場を整備することによって、彼らの仲間、生き甲斐、居場所づくりも視野としている。

## 2. 仲間づくりをサポートする

ボランティアの平均年齢が 65 歳で推移しても、世代が変化するに従って昔を伝承する技術者が少なくなる。10 年後には 65 歳でも既に昭和半ば以降の世代で占められ、開拓の村の展示の主体である明治、大正期を語る人はいなくなる。それを回避するためには、ボランティア間の伝承活動が必要となってくる。

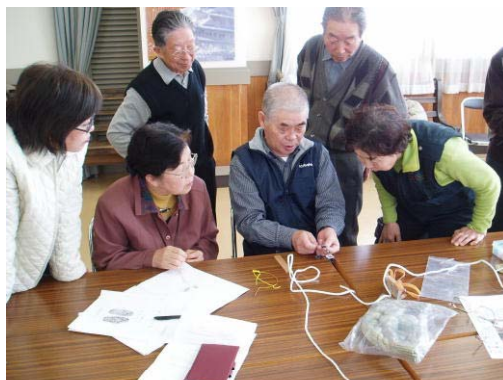
また、過日に行った『高齢化社会に対して博物館がすべきこと』<sup>(2)</sup> のアンケート調査では、「高齢者が楽しめる講座などの行事」「高齢者の経験や能力を活かす事業」「高齢者が親しみやすく、くつろげる博物館」に対して興味・関心が高い数値を示していることから、ボランティアのニーズに対して、彼らの長い生活経験や高齢者としての立場や生活においてリアルタイムに体現している情報や知識を提供してもらおうべく、通常の活動とは別に各種グループを構成し職員とともに課題の打開や新規事業の企画にあたっている。

ボランティアが通常の活動の他にさらに新しい分野に挑戦するのはなぜか。

これには、北海道の財政問題や指定管理者制度など開拓の村を取り巻く環境が変化するなかで、現在の北海道の礎を築いた明治・大正期の人々の暮らしを体感できる開拓の村を後世に残すために、地域の大人として先人から伝え聞いてきた昔の話や学んだ技術を次代を担う子ども達に伝える、開拓の村を住民の立場で残すといった猛烈な使命感がボランティアに芽生えたからである。

この環境で生まれたのが「演示支援グループ」である。このグループの趣旨は技術の伝承と向上を図ることで、展示資料の更新や新製品の開発、地域へ技術者を派遣するなど、自分たちの生き甲斐づくりが開拓の村の活動に大きく貢献するというものである。

右写真は、わら細工の新製品開発に向けて学習を行っている光景で、こうした学習会が毎月 1 回開催されている。



ボランティアの学習会（演示支援グループ）

一方、先のアンケート回答で「博物館はそれぞれの設置目的をきちんと果たすように努力することが大切だ」とした回答が多く、現実として利用者数や行事内容、特別展の展示内容に関心が高いことから、次頁の表のようにそれぞれテーマを設けて 4 つのグループを立ち上げ、定期的に打ち合わせを開催している。「演示グループ」を含めてこれらのグループには必ず職員が 2 名以上メンバーとなり、ボランティアとともにグループを構成している。

テーマ	グループ名	人数
児童生徒に対する学習支援策、学校の授業への協力	学校支援グループ	14
開拓の村の広報宣伝活動や入場者増加策	広報支援班	57
ボランティアの組織運営、活動内容、開拓の村の事業の企画参画	活動支援グループ	22
研修や旅行の企画実施	研修・旅行グループ	11

\* 構成人数は各グループに所属する重複者あり。職員は除く

また、ボランティアが有している技術を活用した学習会も実施している。村内に植生する樹木や花などに対する来場者の質問が多いこと、ボランティアのニーズも高いことから平成 17 年度に初めて開催した樹木の観察会「むらの樹木」では講師と資料作成をボランティアにお願いした。また、平成 16 年度に実施した学習会「漁場の話」と「農家の話」では、漁場や農業を営んでいたボランティアを講師に迎えて実施した。いずれも、私たち職員も聴講しボランティアのニーズとマッチングした企画として継続的に実施している。

職員にとっても、ボランティアの経験談を通して大正から昭和初期の人々の暮らしぶりを職場で入手することができるので、最良の研究の場ともなる。

### 3. 技、知恵を後世へ伝える

通常の活動の他に、ボランティア相互の学習や仲間づくり、職員や来場者との交流の場を頻繁に設けつつある開拓の村ボランティア。

こうした学び合いを継続する過程で、ボランティアは開拓の村における自分たちの役割、さらに地域における「先達」としての使命を体得し、個々のライフスタイルに活性化をもたらしている。

右写真は、近郊の社会教育施設で子どもたちに「わらざうりづくり」を指導している光景である。



地域の児童にわらざうりづくりを教える

このように、開拓の村でより高度化された技術、または培った技術や知識を開拓の村内にとどまらず、地域社会に伝承するとともにボランティア自らが地域づくりの旗手としてその力が発揮される環境を整備していくことが、高齢化社会において博物館の存在意義を示す一つの有効な戦略であると思う。

### 4. 今後の課題～超高齢化社会と団塊世代の流出にむけて

北海道の高齢化率は 2004 年度（平成 16）で 20.8 % と他の都府県と比較して高くはない。さらに開拓の村が位置し、ボランティアの居住地域の 90 % を占める札幌市においても 65 歳以上は 17 % と地方圏では低い数値を示す。

しかし、いわゆる団塊世代が大量に流出する 2007 年（平成 18 年）以降には確実に高齢者層は増加し、北海道では 2025 年（平成 37）には高齢化率 32.3 % と、全国でもハイレベルとなることが予測されている<sup>(3)</sup>。こうした高齢者層の「働き場」、「生き甲斐の場」といった「居場所づ

くり」が官民間わず要求され、地域社会の学びの場として博物館が生き残っていくためにも、私たちはに課せられた役割は大きいと思われる。

注1 『新しい時代の生涯学習』 関口礼子他著 2002

2 「高齢者ボランティアに対するアンケート調査」2004 日本博物館協会

3 「平成17年版高齢社会白書」

## 奥会津地方歴史民俗資料館における高齢者との連携

奥会津地方歴史民俗資料館学芸員 澤田けい子

### 1. はじめに

田島町は、福島県の南西に位置し、会津地方の西の玄関口あたり、南端は栃木県と接して、阿賀川、檜沢川、水無川が町の北部で合流し、合流地点に市街地が発達して人口は 13,400 人で、政治経済とも南会津郡の中心地になっている。

総面積の89%を林野が占めており、集落は河川に沿って狭小な平坦地を開け、年平均気温は10℃の寒冷地で、豪雪、過疎、そして少子高齢化が進行している山村の町である。

奥会津地方歴史民俗資料館は、敷地面積12,500㎡を有し、新築した収蔵庫・展示館、解体移築した染屋、馬宿など古民家3棟のほか、木地小屋、炭焼き小屋、あづまや、水車小屋、バッテリー小屋を復元し、順路として旧日光街道、一里塚などを再現している。さらに、平成17年度に旧日光街道(又の名を会津西街道ともいう。)の山王峠にあった茶屋を移築復元している。

### 2. 活動内容

移築したそれぞれの古民家は、建築物を見せるだけでなく、当時の生活そのものも後世に伝えながら、その利活用を図るべく、様々な事業に取り組んでいる。

国指定となっている古民家の馬宿では、地元の古今地区の老人会の皆さんが土・日・祝日に交代で通ってくる。そして囲炉裏を囲み縄よりや草履作りなどのわら細工をさせていただいているが、当時の技法を忘れかけてきたメンバーには、90歳のおばあちゃんが先生になって訓練をしている。

見学者でわら細工体験の申し込みがあると、この方たちが指導者になる。

資料館のなかでもわら細工をしている民家は人気があり、再来者は入館料を払うとまっ直ぐそこに行く方、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に撮った写真を贈ってくれる方もある。郵便の宛先は「民俗資料館おばあちゃんへ」で配達になってくる。これも田島の良いところであろうか。

県指定の旧猪股家は、18世紀に建てられた農家で、家の半分以上が土間になっており、住まいと作業場が一緒になっている。

土間には当時のようにこき箸や千歯こき、足踏み脱穀機を使つての脱穀や木摺臼での籾摺り、唐箕、万石での選別、唐臼での米つきなど昔の農作業が体験できるように再現している。

また、石臼を使って、きな粉やそば粉、団子の粉などを挽くこともできる。

古民家の庭では、木を切ったり割ったりして薪を作り、近くの裏山で杉の葉を拾い、囲炉裏で火をたき、昔なつかしい食べ物(すいとん・ジャガイモのごろ煮)をつる鍋を使って煮たり食べたり、当時の生活そのものを体験できるようにしている。



昔の生活の話をしながらのわら細工体験



木摺臼での籾摺り



照明器具の変遷では・松明かし台、行灯、ランプ、電気と変わっていく様子を、民家を真っ暗に行っている。

これらの指導は、荒海地区老人会の方をお願いをしているが、むかし自分がやっていたことを孫に教えるので生き生きとして話している。そしてこれらの体験学習は、小学校の総合学習に活用されている。



昔の食文化体験(すいとん)



体験学習の説明

資料館のもうひとつのテーマに「年中行事の再現」がある。

一年を通して、節々に行われてきた数々の行事の中から、代表的な民俗行事を取り上げて、ふるさとの良さを知って欲しいと行っている。

その時々になぜこの行事が行われてきたのかを考え、物の豊かさはないが心の豊かさを感じる昔の生活と、その心根を子供達に伝えることを目的に、町内の小・中学生とその保護者を対象に行っている。

主な年中行事をご紹介します、

☆ 「端午の節句」を体験しよう!!

当地方の食文化体験(端午の節句に笹巻きを作る。)

端午の節句のはなし

笹巻き作り体験

菖蒲さし体験

昔話(奥会津昔ばなしの会)

昔の遊び(笹舟・笹笛等を作り遊ぶ)

笹巻の試食



笹巻きを作る

☆ 「十五夜行事」を体験しよう!!

昔話(奥会津昔ばなしの会)

十五夜のはなし

餅つき体験

琴の演奏・コーラス

琴の演奏体験

箏曲鑑賞

餅の試食



餅つき体験

☆ 「正月行事」を体験しよう!!

昔話(奥会津昔ばなしの会)

正月行事のはなし

団子づくり体験

チンボのお通り体験

雪踏み体験

昔の遊び(羽根つき・福笑い)

団子の試食

みかん撒き



チンボのお通り

☆ 「天神講」を体験しよう!!

昔話(奥会津昔ばなしの会)

天神講の唱えごと

昔の遊び(こま作り・ゴム鉄砲作り)こまは資料館の敷地内で拾った、どんぐりで作り。

会食(当地の天神講で作られていた五目御飯・豆腐から・汁・つけもの等の献立をつくる。)

この年中行事も、古今地区の老人会の方々に、自分達が今まで行ってきた年中行事を若いお母さん、子供達に伝えていただいている。保護者の方にも子供とゆっくり楽しみながら体験し、昔の良さを知っていただき、1人でも多くの家庭で年中行事を再現していただくことを願いながら、少し早い日の土曜日から日曜日に行っている。

その他の年中行事は、古今地区の老人会の方々が七夕さま・お盆飾り・アガリ地神さま・えべす講・初午・サガリ地神さま等は、古民家にセットした神様にお供えし、解説シートを来館者に配っている。

新たな取り組みとしては、「昔話の会」を立ち上げて、高齢者の方々に先生に練習会を月2回開いている。現在、会員は11名であるが、楽しく語り部の練習を行っている。

古民家の囲炉裏で聞く昔話は、学校や保育所での昔話とは違い、子供たちの心に残るのではないかと、保育所の小遠足などとタイアップして行っている。また、年中行事など、これまでの練習の成果を発表することになっている。

本年度移築復元した山王茶屋では、機織りの体験ができるようにと機を3台組立て、おばあちゃん達が機織の再現に取り組んでいる。

奥会津地方歴史民俗資料館は、私達の祖先が何百年もの間、使用してきた生産のための道具や生活用具が中心の資料館で、多くの高齢者の方々に支えられている。高齢者のボランティアグループ「りんどう会」の方々は、年2回、敷地内の除草にも来てくれている。

高齢者1人1人が学習意欲を持ち、より幅広い、より質の高い高齢者の生きがいの場、生涯学習の拠点として、これまでの資料館の集める・保存・伝える基本的な活動に、今後は町民と共に探究し、知る楽しみを『分かちあえる』資料館をめざしていきたいと考えている。

## 地域の自主団体と那須野が原博物館の連携

那須塩原市那須野が原博物館館長 金井忠夫

### はじめに

那須野が原博物館は、平成 16 年 4 月 23 日に「那須野が原の開拓と自然・文化のいとなみ」のテーマのもとに開館した。その母体は、昭和 52 年開館の西那須野町郷土資料館にある。資料館は「地域とともに歩む」を活動スローガンとし、開館 5 年目の昭和 57 年には現在の学校支援ボランティア「石ぐら会」が結成された。その前後に自主団体が結成され、ラフな協力関係が結ばれた。これからの博物館活動の方向性について、博物館が地域(住民)とどのように関わるかという中で、自主団体との連携が、今後の博物館活動の一つの手段となろう。

### 1. 那須野が原博物館を取巻く地域性と経過

那須野が原博物館は、栃木県北部に位置する那須塩原市に所在する。平成 17 年 1 月 1 日に西那須野町・黒磯市・塩原町が合併して那須塩原市が誕生した。市域は那須扇状地の扇頂部・扇央部の台地状の部分と山地からなり、歴史的に台地上の部分では、明治の開拓により開かれたところが多く、明治の殖産興業政策を担った地域でもある。このため、「フロンティア精神」的な土壌を持ち、一例として、一地区(ほぼ大字単位)で、300～500 ページの上製本の地域誌を独自で編纂しており、すでに 10 地区ほどが出版している。また、西那須野地区は自主的な活動意識が定着している地域である。なお、自主団体との経過をたどると下記のとおりである。

○昭和 48 年 那須野ヶ原開拓史研究会結成 ○昭和 52 年 西那須野町郷土資料館開館 ○昭和 57 年 案内ボランティア「石ぐら会」結成 ○昭和 62 年 那須文化研究会結成 ○平成 4 年 郷土資料館運営委員会より「博物館建設に向けての博物館の基本的な考え方」答申 ○平成 5 年 郷土資料館焼失 ○平成 13 年 博物館建設工事開始 ○平成 15 年 ミュージアムフレンズなすの結成 ○平成 16 年 那須野が原博物館オープン ○平成 17 年 合併により 3 館を附属施設とする。博物館協議会に「那須野が原博物館と地域活動の活性化について」を諮問

こうして、那須野が原博物館が、地域遺産の保存と継承を担い、歴史・民俗・考古・美術・自然・文学の 6 部門を対象とする総合的な博物館として、「那須野が原」をフィールドとする。地域との一体性を持ち、「那須野が原学」の構築を目指す。さらに、時代を担う子どもたちに対して体験を中心とした学校支援事業を展開する中で、地域・市民との協働の姿を模索し、構築しようとしている。

### 2. 自主団体との連携

さて、地域の自主団体と博物館との連携において、連携密度は、それぞれに違いがあるが、博物館と関係持つ自主団体は以下の 9 団体である。

#### ① ミュージアムフレンズなすの(友の会)

いわゆる「友の会」であるが、友の会が博物館に依存傾向の中で、あえて友の会の名称を使わずに、独立独歩の自主団体である。

- ・平成 15 年 9 月結成(博物館開館の半年前)
- ・活動-学習活動部(講演会・見学会・学習会〈案内ボランティア養成〉) ショップ運営部(ミュージアムショップの経営・博物館事業としての体験学習指導)
- ・会員 個人会員 113 名 家族会員 40 名 法人会員 A 4 社 法人 B 19 社 法人 C 7 社 合計 183

## ② 学校支援ボランティア「石ぐら会」

ボランティア養成講座が昭和 57 年 2 月に実施され、その受講生たちにより資料館案内ボランティア「石ぐら会」が結成された。翌年の昭和 58 年からは石ぐら会が独自に、ボランティア養成講座を開催した。活動としては、団体で見学に来る学校の児童に対して、館内での博物館案内とビデオ学習指導、それに展示室での那須野が原開拓の暮らしの様子を中心に解説する。屋外では、開拓当時の苦労を体感してもらうため、運搬方法としての「水汲み」「モッコ担ぎ」を体験させる。一方、学校の要請に基づいて会員が学校へ赴き、講話や生活用具の体験指導を行う。

- ・昭和 57 年結成 現会員 24 名(年会費 2000 円)
- ・活動内容:学校見学に対する那須野が原開拓の解説・展示説明・外での体験指導(水汲み・モッコ担ぎ)・昔の生活用具の体験指導 年間 1 5 5 校約 8000 名(平成 16 年度実績)を担当
- ・『那須野が原ガイドブック』S63 年 6500 部 『那須野が原歴史探訪』H11 年 3000 部 『石ぐら会 20 年の歩み』H15 年 1000 部(これら全て、独自に編集し会の経費で出版)
- ・毎年地域に対して「那須野が原の入門講座」を開催

## ③ 黒磯郷土館ボランティア「いろりの会」

- ・平成 14 年活動開始。現会員 15 名(年会費 1000 円)
- ・活動内容:付属施設の黒磯郷土館に来る学校の子どもたちに、館内の展示資料の解説と古民家の中で生活の様子や民具の解説。(年間 20 校程度)

## ④ 那須野ヶ原開拓史研究会

研究団体として昭和 48 年に結成。年間 2 回の会誌『那須野ヶ原開拓史研究』を発行し、平成 17 年度現在で 59 号を数える。また、研修視察においては、北は北海道開拓から南は明治の元勲の足跡を追って鹿児島まで足を伸ばした。以前に、「那須野が原の道」「那須野が原の鉄道」などのテーマのもとに、郷土資料館が企画展を行い、会が出版物を編集発行するという共同事業を行なう。・現会員数 173 名

## ⑤ 那須文化研究会

昭和 62 年に結成、『那須文化研究』は 19 号を数え、より専門的な立場での原稿執筆と編集を行う。また、地域に開かれた活動として、講演会や地域学習会を開催し、地域への還元にも力を入れている。今年 20 周年を迎え、今までの研究成果を踏まえ、一般向けの出版物を編集中である。・現会員数 161 名

## ⑥ 那須野が原の自然調査会

平成 10 年に結成され、那須野が原を中心とした自然環境調査と博物館自然系資料の収集ボランティア活動を行なう。月 1 回の定例調査会と年 3 回程度の観察会を実施。会員内の情報交換として毎月たよりを発行。現会員 21 名。

## ⑦ 西那須野古文書研究会

西那須野古文書研究会は、昭和 58・59 年の古文書解読講座を経て結成された団体で、地域に対して古文書入門講座を開講し、平成元年には 460 頁を超える上製本の『那須開墾社農業日誌』を発行した。

## ⑧ 西那須野土器づくりの会

資料館の土器づくり教室の実施の中で、当初土器焼きに失敗したことが、受講生の奮起につながり、会が結成された経緯を持つ。子ども土器づくり教室や学校での土器づくり体験を担当している。

## ⑨ 塩原文学研究会

塩原に来た文豪たちの足跡をたどり、勉強会を実施しながら案内ボランティアや出版の発行、文学碑の建立にも力を入れている。

このように、那須野が原博物館と地域の文化活動を行なう自主団体とが存在し、それらが密度の違い

はあるが連携を保っている。

また、ボランティアといえども自主団体である。会員は会費を払って活動するといった形式をとる。一方で、保険は会が独自で入り、昼食代・交通費は博物館から一切支払っていない。団体としての活動目的が子どもたちへの案内活動であるといった認識の上に、博物館とボランティアは成り立っている。



西那須野土器づくりの会の指導による土器づくり教室



石ぐら会員による展示室での開設風景

終わりに

地域の文化を創造する自主団体活動・ボランティア活動を継続して行くことは、かなりのエネルギーを必要とする。その点で、学校支援ボランティア「石ぐら会」をはじめ各団体が、長年活動を継続してきたことに敬意を表するとともに、今後の活動を期待したい。ただ、これからの活動は、強固な団体組織は馴染まないのかもしれない。社会の変化とともに、活動体のスタイルも変わりつつある。

《自主団体と那須野が原博物館の関係略図》

